

## ショートステイすばる 単独型短期入所事業の役割

ショートステイすばるは夕方 4 時頃からにぎやかになる。できるだけ日常生活の流れや習慣を崩さないために、平日は通所先や学校が終わってから利用するのが通常だからだ。彼らのほとんどは戸惑うことなくリビングに入ってくる。そして、ある人は、スタッフと笑顔でハイタッチ。ある人は目を合わすことなく、いつも自分が宿泊する部屋へと荷物を運ぶ。彼らなりに、ここへ来たら「こう」と決めているのだろう。彼らの行動はよほど自然で、ここでの生活を受け入れているように見える。

しかし、私は、「短期入所サービスは知的障害児者の権利を侵害するおそれがある<sup>※1</sup>」ということ、戒めのように自分に言い聞かせている。なぜなら、彼ら自身が望んで宿泊しているとは言いきれないからだ。家族の都合や休息、あるいは将来、親が倒れた時に備えるという理由での契約がほとんどなのだ。彼らが、「本当はこんなところに来たくなかった」という思いを抱えているのではないかと。知的障害のために「NO」と言えないだけかもしれない。あるいは、身の回りに起きていることを不当と感じ得ないがために、短期入所に連れてこられてしまっているのではないかと。

もちろん家族を責めるつもりは毛頭ない。そもそも、あらゆる意味で「支え」や「家以外の居場所」が足りないために、家族への依存度が高くなってしまっていることに原因があるからだ。普段から必要な支援が得られ、将来への不安が募らなければ、何も短期入所に預けなくてもよいはずである。一方、単独型短期入所サービスは比較的敷居が低く<sup>※2</sup>、利用しやすいという一面もある。すなわち、短期入所という入口が広く包括的なサービスが、本来個別に、かつきめ細かく充足されるべきニーズを丸々飲み込み、封じ込めているかもしれないということだ。だとすれば、私たちは利用者の本当のニーズを知り、必要なサービス等に結び付けることに努めなくてはならない。また、それらの実態を集約して地域の課題を導き出し、共有することに取り組む役割も有しているといえるだろう。

たとえば、毎日在宅での入浴支援が確保できれば、宿泊までは必要ない人も多いただろう。同じように、通所の事業所が夕方 6 時までで営業していれば、あるいは、土日祝日の外出支援サービスの質量がもっと豊かだったら、自分に合ったグループホームや一人暮らしを支える仕組みが整っていれば……。

このように考えると、単独型短期入所サービスをいつまでも緊急避難やレスパイトといった利用事由にとどめておくのではなく、障害のある方および家族の生活をより豊かなものにしていくためのオプションにできるように取り組んでいきたい。については、今年度は、ショートステイすばるの利用者の顧客満足度調査やご家族を含めた意識調査を行う予定だ。またこの場で調査結果を報告したいと思う。

※1 厚生労働省平成 24 年度障害者総合福祉推進事業『地域における短期入所の利用体制の構築に関する調査報告書』において全国の短期入所事業所における 1 か月の利用実人数の障害種別内訳では知的障害者が 53.4%で最も多く、重複障害者と障害児を含めると 82.6%であった。

※2 短期入所サービスは他事業に併設されている場合がほとんどのため事業自体にサービス管理責任者が置かれていない。また、個別支援計画の策定が義務づけられていない。この事業自体が緊急避難やレスパイトという性格を持ち、利用者自身の目的達成を目指すものではないということであろう。近年は私的理由での利用も可能のため、誰でも気軽に利用できる雰囲気があると思う。